

田島征三

かなり前のことだが、ある公立美術館に預けてあった絵を、「寄贈してくれないか？」との依頼があった。「傷みがひどいので修復したい。ついては 1600 万ほどお金がかかる。寄託品では県民税を使うことが出来ないので、寄贈してほしい」という。その作品は、1960 年代に描いた絵で、質の悪いベニヤ板に、ポスターを裏返して貼りつけて描いた作品なので、すでに絵の具の剥落が始まっている。それを公共の予算で修復してくれるのはありがたい。喜んで寄贈することにした。だが少しだけ、疑問が残った。ぼくが、ケチで嫌なヤツだから、せっかく美術館が好意的にやってくれることなのに、「絵を描いた人はただで、その絵を直した人は 1600 万なの？」なんて細かいことを考えてしまった。もちろんそんなことは黙っていたのだけれど、あるとき、故元永定正(註 1)と話している折に口に出してしまった。元永は、「日本では技術には金を払うけれど、感性にはお金、払いまへん」とおっしゃった。そういえば元永の作品は、ペンキを混ぜてキャンバスの上にドバツと流した、一見技術的な修練のない絵のように見られて、美術館は不当に安く買うのだろうな。一方、岩絵の具を上等の和紙に綺麗に流しこんだ、たいそうな技術だけで内容はなにもない絵が、すごい値段で買い取られている。技術が優れているかどうかで価値が決まるようなところがある美術の世界では、ただ力任せに描いたヘタクソなぼくなど、若いときからずいぶんひどい目に遭ってきた。アールブリュット(註 2)が見向きもされないまま、捨てられたり、壊されたりしてきたのは、こんな理由からなんだろうと思う。アートが長い間、芸術家という専門家に独占されてきたのは、師匠についたり、学校に入って一般人には及ばぬ技術を習得した者が、デッサンがどうの、絵の具の塗り方がどうのと、自分達だけが持っている特権的な技術を売り物にしてきたからだ。技術のみがもてはやされる風潮に「待った」をかけたのはアールブリュットたちではないだろうか。彼らのほとんどは、高等な技術教育を受けていない。だからこそ、人々の魂をわしづかみにする作品が創れるのだ。一方的に技術を見せつけるのではなく、見る人々の魂と真っ向から響き合うのだ。

ぼくは、ほとんど画家としての技術はおぼつかない。そればかりか日常的に必要な技術が全くない。だから『技術』を目の敵にしていると思われる、それは少し違う。東京三多摩地域の一般廃棄物処分組合のように構造上の欠陥から漏れ出した有害物質が環境を汚染している事実をごまかすための『技術』に長けているのは許せない。現政権のように悪事を隠す技術が下手なのは、国民がわかりやすくてよいのだが・・・。

註 1― 1922 年三重県生まれの前衛芸術家。55 年、師事していた吉原治郎をリーダーとする具体美術協会に参加。

註 2― 20 世紀に活躍したフランスの画家 ジャン・デュビュッフェが、精神病患者や孤独に一生を終えた人間が人知れず残した絵に感動し、ブリュット(生)の芸術として世に問うた。日本では主に知的障がい者の芸術作品を云う。